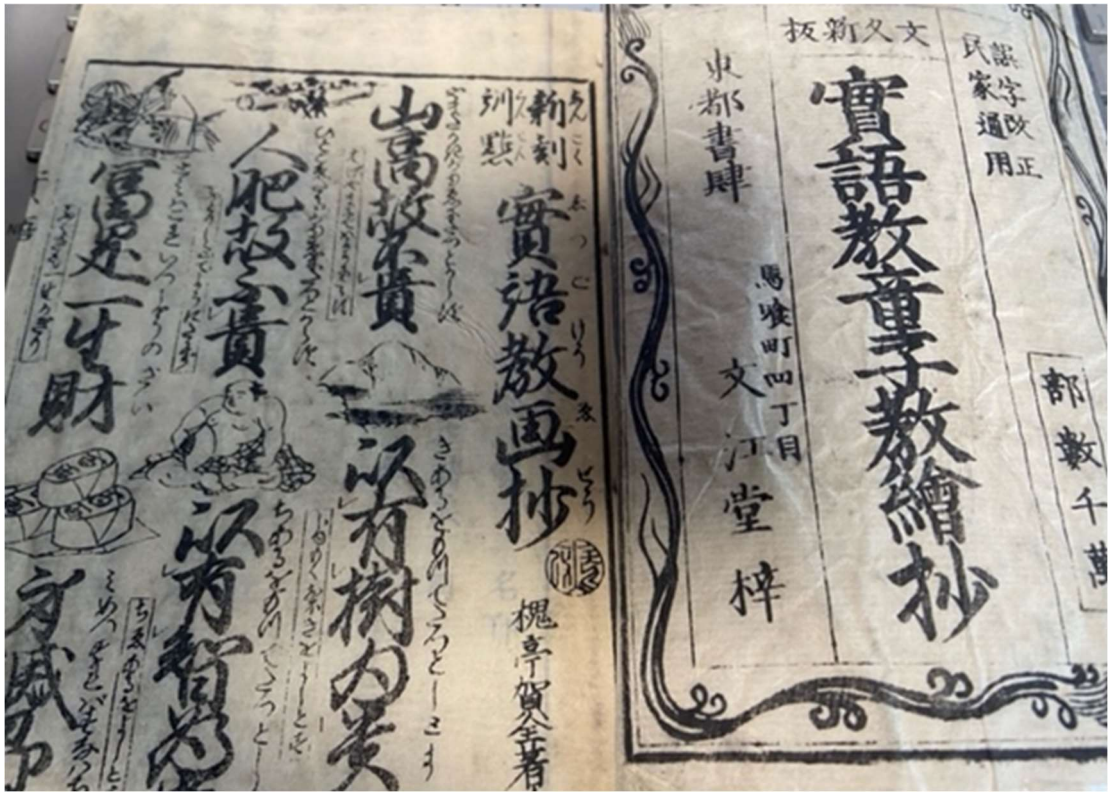
古書のたのしみ（令和五年六月）

土屋　博

一「實語教童子教繪抄」

（東都書肆馬喰町四丁目文江堂梓、文久新板、部數千萬、二九丁）

古書價格二千圓也。寺子屋の教科書。古書の狀態頗る佳し。「山高きが故に貴からず、樹有るを以て貴しと爲す。人肥えたるが故に貴からず、智有るを以て貴しと爲す」に始まる。文語の勉強は、迂遠なれど昔の人の教科書の勉強より始むべし。



二「高等國語讀本　卷二」

（金港堂書籍、明治三十三年刊、定價金拾八錢、四四丁）

古書價格五百圓也。室鳩巣著の駿臺雜話「老僧の接木」など掲載せらる。文語名文百撰にも收錄せられたる名文なり。

三「日本文學史教科書　完」東京帝國大學文科大學助教授藤岡作太郎著
（開成館藏版、明治三十四年刊、賣價金四拾五錢、一〇〇頁）
古書價格二百圓也。
藤岡作太郎は、一八七〇年生れ、一九一〇年惜しくも三十九歳にて歿す。東京帝國大學助教授。第四高等中學校同窗の西田幾多郎、鈴木貞太郎（大拙）と並び「加賀の三太郎」と稱せらる。
太古より明治維新前までを上古、平安朝、鎌倉室町幕府の世、江戸幕府の世の四大期に別つ。源氏物語については、「光源氏といふ貴族を主人公として上流社會の生活を寫す。照應波瀾最も整ひ諄々として說き去り說き來り、篇中の人物一々その特性を發揮せるが中に、光源氏の妻紫ノ上は式部が苦心して女子の模範として寫せるものなり」とす。

四「中學　國文教科書　修正十版　卷四」吉田彌平編
（光風館藏版、大正四年修正十版、定價金二拾八錢、一三〇頁）
古書價格二百圓也。初版は明治三十九年。
吉田彌平は、一八六九年生れ、一九三七年歿。東京高等師範學校教授。
目次は、幸田露伴「洗心錄」（如何なる處にも樂しき地はあるべし・・・）、德冨蘆花「自然と人生」（富士雪を帶ぶ、さやかに雪を帶ぶ・・・）、東郷平八郎「海軍戰死者を祭る」（海陸の戰雲已に散じて滿都の和氣靄々たり・・・）云々。

五「漢文解釋」第一高等學校教授島田鈞一著
（有精堂、大正十年刊、定價壹圓六拾錢、五三〇頁）
古書價格二百圓也。
島田鈞一は、一八六六年生れ、一九三七年歿。第一高等學校教授。
言志錄等十種の書につき其尤も緊要なる文章を抜萃し之に解釋を施し講證讀の力を養はしむ。十種の書とは、言志錄、日本外史、十八史略、小學、文章規範、續文章規範、唐宋八家文、論語、孟子、雜（史記、三國志、日本政記など）のことなり。

六「薩調四絃　愛吟集　卷之二」
（一水會本部、昭和二年三十五版、定價金七拾錢、八八頁）
古書價格二百圓也。初版は大正二年。
昭憲皇太后御歌「金剛石」（金剛石も磨かずば玉の光は添はざらむ）、久坂玄瑞「七卿落」（世は刈菰と亂れつつ茜さす日もいとくらく瀨見の小川に霧立ちて隔ての雲となりにけ

り）、谷小波「廣瀬中佐」（神州男兒數あれど男兒の中の眞男兒世界に示す鑑とは廣瀬中佐が事ならむ）など。

七「基本漢文解釋法　全」塚本哲三著
（有朋堂、昭和十八年刊、定價金貳圓九拾錢、四四七頁）
古書價格三百圓也。
解釋篇の冒頭は青山述于「明徵錄」より、「德川家康、參州に在りし時、毎夏常に麥飯を食ふ。左右嘗て粱飯を進む。家康之を却けて曰く、汝が曹吾が意を曉らず。方今時亂世に屬し、干戈日に動き士卒煩擾して寢食に安んぜず。吾れ豈に獨り飽くに忍びんや。且つ儉を以て用を足せば民を勞せずして以て自ら豐かなりと」云々。家康の心掛けの立派さを說けり。

八「一燈照隅集」
（關西師友協會、昭和五十二年刊、頒價二千圓、五〇〇頁）
古書價格五百圓也。
安岡正篤を師と仰ぐ關西師友協會の創立二十周年記念出版物なり。
安岡正篤は、一八九八年生れ、一九八三年歿。舊制一高、東京帝大法學部卒。皇居內に設立された社會教育研究所學監兼教授、金鷄學院主宰、終戰詔敕を刪修。歷代總理の陰のご意見番なりき。
「一隅を照らす」は、傳教大師の言葉にあり、更にもとをたださば、史記の齊の威王の言葉に至る由。本書には雜誌「關西師友」に過去に揭載されたる記事六十余りを收錄す。松下幸之助、「明治百年に思う」に曰く、「英靈よ、あなたは犬死ではなかつた」、「殉國者たちの靈に對して外國の國王が儀禮としてでも花束を献げるというときにどうして日本政府はそれを遠慮したのか」と。

九「鄕土偉人傳　安岡正篤物語」奥田哲郎著
（河內新聞社、平成四年刊、定價五千五百圓、本文二一九頁）
古書價格五百圓也。函入。
著者奥田哲郎は大正十年生れ、安岡の卒業したる小學校ののちの校長を務めたる緣にて安岡氏の傳記を河內新聞に連載せり。本書は當該記事を集大成したるものなり。終戰詔敕の「萬世の爲に太平を開かんと欲す」との名文句の誕生祕話などを含む。

十「安岡正篤墨蹟集」關西師友協會編
（致知出版社、平成九年刊、定價七千圓、本體九四頁＋解說書九一頁）
古書價格五百圓也。函入。安岡正篤先生生誕百年、關西師友協會創立四十周年記念の出版物なり。墨蹟の第一は「師恩友益」、吉田松陰「士規七則」よりの言葉にて、師友會命名

のもととなりたるものなり。第二は「古教心を照らし、心古教を照らす」、鎌倉末期臨済宗の僧虎關の言葉なり。

（令和五年七月五日受附）